

# 頼山陽「西遊詩卷」 訳注（一）

谷 口 匡

## 序

頼山陽（一七八〇—一八三三、本名は頼襄<sup>のぼる</sup>、字は子成、山陽はその号）は、文政元年（一八一八）、三十九歳の時に、父・春水の三回忌法要のため広島に帰省し、そのまま九州旅行に出発している。すなわち同年一月に京都を發つて二月に広島に帰り、三月六日に広島を出ると、下関を経て九州に入り、博多、長崎、熊本、鹿児島と各地を回り、さらに大分などを經由して広島に戻り、母を伴って帰洛したのは、翌文政二年の八月十四日であった。この大旅行の中で作られた詩は、彼の詩集『山陽詩鈔』の卷三〜卷四に「西遊稿」上・下として収められている。これは、山陽の詩歌中の白眉とされるもので、彼が道中に目にした風物や各地での文人との交友が歌われている。

ところでこの「西遊稿」とは別に西遊中に知人に与えた山陽自筆の詩集が存在していたことが、木崎好尚『頼山陽全伝』によって知られる。文政元年九月の記事に「野菜町の支店（本店は阿久根）に來合せた河南源兵衛に招かれ

『西遊詩卷』を揮毫す」と見えるのがそれである。さらにその続きに「この詩卷は明治十九年秋、その孫源吉の手に複製され〔東京・東陽堂刊〕とあるように、のちにこれを河南源吉なる人物が複製して出版した。それは『山陽先生真蹟西遊詩』（東陽堂、一八八六）という書物で、この複製本から詩集の全容を窺うと、山陽が九州へ旅行した時、京都から鹿児島に至るまでに作った詩を大部分とし、それに若干の旧作を加えた五十三首（但し重野成斎の跋では五十二首に数える）を選んで河南源兵衛のために揮毫したもので、『頼山陽全伝』に「詩卷」とあることから卷子本であつたと想像される。私もこれを「西遊稿」と区別する意味で「西遊詩卷さいゆうしかん」と呼ぶことにしたい。

「西遊詩卷」は「西遊稿」からの抜粋ではない。旅行中に揮毫したものだから当然、成立としては、定稿である「西遊稿」に先んじ、後述することく「西遊稿」と一致しない部分がしばしば見られることが注目される。ここに訳注という形で「西遊詩卷」を紹介するのはその理由からである。

本訳注は、『山陽先生真蹟西遊詩』を底本とする。底本を活字におこすにあたっては、『山陽詩鈔』（以下『詩鈔』と略記）及び『頼山陽詩集』（木崎好尚・頼成一編『頼山陽全書』、頼山陽先生遺蹟顕彰会、一九三二―三三、所収。以下『詩集』と略記）を参照したが、俗字略字は原則として正字体に改めた。

「西遊詩卷」に取られた詩を現行の「西遊稿」と比較してみると、字句の異同がかなりあることに気づく。これは「西遊詩卷」が成つてから「西遊稿」として『詩鈔』に収録されるまでに、山陽自身が何度も手を加えた結果であると思われる。「西遊詩卷」は、いわば「西遊稿」の詩の初案がある部分保存したものと言え、従つて、そうした山陽詩の推敲過程を窺う意味で少なからぬ意味を持つものである。注釈の際には、努めて『詩鈔』『詩集』との異同を記述して、参考に供した。

訳注においての主な参考文献は、日柳燕石『山陽詩注』（一八六九）、三宅樞台『山陽詩鈔集解』（一八八一）、伊藤

露谿『山陽詩鈔新釈』（山陽詩注刊行会、一九四二）、頼成一・伊藤吉三『頼山陽詩鈔』（岩波文庫、一九四四）、入谷仙介『江戸詩人選集 8 頼山陽 梁川星巖』（岩波書店、一九九〇）、水田紀久・頼惟勤・直井文字『新日本古典文学大系 66 菅茶山 頼山陽 詩集』（岩波書店、一九九六）などである。

伝記的な事柄は主として上記『頼山陽全伝』（『頼山陽全書』所収。以下『全伝』と略記）に依り、一部、中村真一郎『頼山陽とその時代 上・中・下』（中公文庫、一九七六）を参照した。

本訳注の作成に関しては、内山知也筑波大学名誉教授及び入谷仙介島根大学名誉教授から数多くのご教示を賜った。また関係資料の閲覧に際して、国立公文書館・九州大学附属図書館・下関市立大学附属図書館のご好意にあずかった。記して、感謝申し上げる次第である。

なお、注釈の便宜上、詩に番号を付したが、紙幅の関係から今回訳注を加えるのは次の十五首である。

- |                           |                     |               |
|---------------------------|---------------------|---------------|
| 1 発京                      | 2 浪華諸友泛舟相送          | 3 山陽途上        |
| 4 帰省芸州遂西遊出境               | 5 始望豊山              | 6 厚狭駅         |
| 7 長府邂逅旧友田廷錫留宿轟飲府城外有潮満潮乾一鵬 | 8 廷錫内人索書戯作          |               |
| 9 廷錫又令内人理吾髮               | 10 題劉先主像            | 11 題源鎮守献弓鎮夢魔図 |
| 12 赤関遇大含禅師師将東遊観富岳賦贈       | 13 題禅師画蘭余平生愛蘭京寓有益栽在 |               |
| 14 赤関寓居題嵐峽春遊図             | 15 檀浦行傲李長吉体         |               |

16 以下の詩については、次号以降において順次紹介を試みたい。



發京

凍蓬瀛雪夢難成  
罨桃江聲

又榕騎阿為談  
吾應指去與之  
杯

如舟程正

泊華池及泛舟小遊

高舫所尾各維  
掩中瓜皮趁早

潮離里為情  
語多矣回頭已過十條

橋

「西遊詩卷」書影（『山陽先生真蹟西遊詩』による）

訳注

1 發京

京を發すきやうはつ

疎篷漏雪夢難成

疎篷そほう 雪を漏らして夢成り難く、

響枕江聲又櫓聲

枕まくらに響く江聲又た櫓聲。

阿母 疾吾應屈指

阿母あぼ 吾れを疾まつて応まに指ゆびを屈くすべし、

知無今夜始開程

知るしるや無いなや今夜始こめて程ていを開ひらくを。

京都を出発する

舟の粗い苦の透き間から雪が漏れてなかなか寝つけず、枕もとには川の流れの音や舟を漕ぐ櫓の音が響いてくる。母は自分の帰省を指折り数えて待っているに違いないが、今夜やっと出発したというのを知っているだろうか。／

『詩鈔』卷三に「下江」と題して収める詩の初案。「下江」の詩は「撼枕江声又櫓聲、疎篷漏雪睡難成。阿孃屈指俟吾久、何識今宵初發程」に改める。『詩集』卷十一にはいづれの詩も収め、「發京」の詩のあとに「初稿」と注記する。〔發京〕山陽は、父春水の三回忌を行うため、文政元年（一一八一）正月、京都を出発し、広島へ向かった。『全伝』文政元年正月に「〔中旬〕。広島へ向ひ発程〔第四帛省〕、伏見より夜舟にて淀川を下る。門人後藤松陰〔廿二歳〕随伴」とあり、そのあとにこの詩を「初稿」と注記して録する。〔疎篷〕粗く編みである舟の苦。〔江声〕川の流れる音。唐の杜甫の「客夜」の詩に「高枕 遠江声あり」とある。〔櫓声〕櫓で舟を漕ぐ音。〔阿母〕母。〔知無〕知っているだろうか。「無」は疑問を表す語氣助詞。〔開程〕出発する意。「下江」では「發程」に

改める。

2 浪華諸友泛舟相送

浪華の諸友 舟を泛べて相い送る

商船銜尾各維橈

商船 銜尾 各おの橈を維ぎ、

中有瓜皮趁早潮

中に瓜皮の早潮を趁う有り。

離思多情語不盡

離思 多情 語って尽きざるも、

回頭已過十餘橋

頭を回らせば已に過ぐ十餘の橋。

大阪の友人たちが舟を浮かべて見送る

商船が相連なってそれぞれ橈を繋いで停泊する中に、朝潮を追いかけて進む私の粗末な小舟がある。／別れの悲しみは心に感じやすく、いくら語っても語りつくせないが、ふと振り返ると舟はもう十幾つの橋を通り過ぎてしまった。

『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一に「発大坂小竹確斎送至尼碕」と題して収める詩の初案。(浪華諸友泛舟相送)『全伝』文政元年正月に「大坂に在り。小竹・確斎等と同舟、土佐堀川を下り、尼崎まで見送らる」とある。(銜尾)相連なるさま。(維)『詩鈔』『詩集』は「停」に改める。(橈)舟を漕ぐのに用いる橈。(瓜皮)瓜皮船のこと。粗末な小舟。山陽が乗っている舟を指すであろう。(早潮)あさしお。(離思多情語不盡)「離思」は、別れの悲しい思い。この句は『詩鈔』『詩集』では「離緒紛紛難語尽」に改める。(回)『詩鈔』『詩集』は「転」に改める。

3 山陽途上

山陽さんやうの途上とじやう

京國春寒製旅衣

京きやうこく國こく春寒はるまむして旅衣りよいを製たち、

未看煤萼弄容輝

未いまだ看みず煤萼ばいがく 容輝ようきを弄もてあそぶ。

馬頭一出山陽道

馬頭ばしやうひと一いつたび山陽道さんやうどうに出いずれば、

玉雪已迎鞭影飛

玉雪ぎよくもつす已すでに鞭影べんえいを迎むかへて飛とぶ。

山陽道の途上にて

春の寒いうちから京都で旅衣を仕立てたが、その頃は梅の木もまだ麗しい花をつけていなかった。／一旦、馬上の人となつて山陽道に出てみると、白い花びらがもう私の鞭の影を迎えるように舞い飛んでいた。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一にのみ収める。「京國」みやこ。ここでは京都。「製」仕立てる。「煤萼」梅の花。「容輝」うるわしい顔かたち。『詩集』は「客輝」に作る。「馬頭」馬上。「玉雪」雪。転じて白い花を指す。ここでは白梅の花びら。

4 歸省藝州遂西遊出境

芸州げいしゅうに歸省きせいして遂ついに西遊出境せいゆうしゆつきやうす

廣城西去幾羊腸

廣城こうじやう西にしに去いくること幾羊腸いくやうちやう、

直接三關道路長

直ただちに三關さんかんに接せつして道路どうろ長ながし。

四十八盤行不盡

四十八盤しじゅうはつばん行ゆけども尽つきず、

盤盤回首望家鄉

盤盤ばんばん首こつへを回めぐらして家鄉かきやうを望のぞむ。

芸州に帰省しそのまま西へ旅立って国境を出る

広島から西に曲がりくねった道をどのくらい進んだであろうか、すぐ関所につつかり、道のりは長い。／「四十八盤」の難所はどこまでも道が尽きることがなく、くねくねと曲がる道中、ふと振り返って故郷の方角を眺める。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一に「四十八盤」と題して収める。〔芸州〕安芸国の別称。〔西遊出境〕『全伝』文政元年三月六日に「この日、『晴。昼前、』広島出発、長崎へ向ふ」とある。〔広城〕ここでは広島を指す。〔羊腸〕道の曲がりくねるさま。〔三関〕三つの関所。具体的にどこを指すかは未詳。〔道路〕道のり。〔四十八盤〕山陽道中の難所を指すか。「盤」は、曲がりくねる。同類の表現は、宋の黄庭堅の「新喻道中 元明に寄す。觴字の韻を用う」の詩に「二百八盤 手を携えて上れり」とある。〔盤盤〕曲がりくねるさま。唐の李白の「蜀道難」の詩に「青泥 何ぞ盤盤たる」とある。

### 5 始望豊山

始めて豊山を望む

藝薇沿海路紆回

芸薇 海に沿って路紆回し、

常看豫峰雲外堆

常に看る予峰の雲外に堆きを。

看到周芳青始了

見て周芳に到れば青始めて了り、

豊山代送翠光来

豊山代って翠光を送り来る。

初めて豊前の山々を望む

芸備は海沿いに道が曲がりくねり、高く聳える伊予の山々の峰が雲の間からいつも覗いている。／それを眺めつつ周



防に至ると青い色をした山並みがここで初めて途切れ、豊前の山々が代わりに緑の光を投げかけてくる。

『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一に「周防道上」と題して収める詩の初案。(豊山 豊前の山。〔芸微〕「芸備」と同じ。すなわち、芸州と備州を指す。『倭漢三才図会』(卷七十八・備中)によれば、備州(古備国)はもと「黄蕨国」と呼ばれていた。これに従えばここは「芸蕨」でなくてはならないが、仄字の蕨では平仄があわない。よって意味の類似した平声の薇の字を借りたのであろう。〔紆回〕曲がりくねる。(予峰)伊予の山々の峰。(周芳)周防の古い表記で『日本書紀』に見える。〔青始了〕唐の杜甫の「岳を望む」の詩に「齐鲁 青未だ了らず」とあるのに拠る。〔翠光〕緑色の光。唐の許渾の「陸侍御の林亭に題す」の詩に「遠山雲曉らかにして翠光来る」とある。『詩鈔』『詩集』は「黛光」に改める。

6 厚狹驛

厚狹驛あさえき

驛亭煙火太蕭騷

驛亭えきてい煙火えんか太はなは蕭騷しょうそう、

山勢西奔如亂濤

山勢さんせい西せいに奔はしって乱濤らんとうの如ごとし。

玄海赤闕知不遠

玄海げんかい赤闕せきかん知しる遠とほからざるを、

行逢商擔賣車螯

行ゆくゆく逢あう商あきんどの担になって車螯しやじやうをうるに。

厚狹の宿場

宿場の旅館は夕方になると炊事の煙がいかにもうら寂しく、遠く山並みが西方に向かって怒濤のように連なっている。／道々、蛤を担いで売り歩く商人に出逢って、もはや玄界灘や下関に遠くないのを知った。

『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一に「厚狭市」と題して収める。「厚狭」現在の山口県厚狭郡山陽町、J R厚狭駅付近。『全伝』文政元年三月に「厚狭に在り、『行達商担売車螯』の句あり」とある。「駅亭」宿場の旅館。「煙火」炊事の煙。「蕭瑟」もの寂しいさま。「乱鶯」乱れたつ波の意か。「玄海」玄界灘。「赤関」赤関閘。現在の山口県下関市。「行」道すがら。「担」かつぐ。「車螯」蛤の一種。

7 長府邂逅舊友田廷錫留

宿轟飲府城外有潮滿潮

乾二鵑

長府にて旧友田廷錫に邂逅し留宿  
轟飲す。府の城外に潮満・潮乾の  
二鵑有り

得酒如潮滿

酒を得ること潮の満つるが如く、

失酒如潮乾

酒を失うこと潮の乾るが如し。

吾因二島名

吾れ二島の名に因って、

得知酒中歡

知るを得たり酒中の歡。

商船來往二鵑間

商船來往す二鵑の間、

百斛眞珠輸伊丹

百斛の眞珠 伊丹に輸らんや。

此地逢君得不醉

此地の地 君に逢って酔わざるを得んや、

況有鮮鱗雪迸盤

況や鮮鱗雪の盤に迸る有るをや。

未到赤関且留滯

未だ赤関に到らずして且く留滯す、

任它春潮帶雨寒　　さもあらばあれ春潮　雨を帯びて寒し。

長府で旧友の小田南陔に出会い、その家に泊まって痛飲した。町の沖合いに満珠島・干珠島の二島があった潮が満ちるように酒を得、潮が引くように酒がなくなる。／私は「満珠」「干珠」の二島の名前によって、酒の愉しみを知った。／この二島の間を往来する商船によって運ばれてくる百斛の酒には、伊丹の酒といえどもかなわないことだ。／このような地であなたと会って酔わないでいられようか、ましてや新鮮な魚が大皿に盛られているというのに。／まだ下関にたどり着かないが、暫くこの長府の地に逗留することしよう、たとえ春の潮に寒々と雨が降り注いでいても。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一にのみ収める。『詩集』の注に「詩題、始メ『長府文学小田廷錫。余故人也。要余留飲数日。戯作。吾戸蓋自此進矣。』ニ作ル」とある。「長府」現在の山口県下関市の一部。江戸時代は長府藩の中心地の城下町として栄えた。「田廷錫」小田南陔のこと。『全伝』文政元年四月に「長府に入り、小田南陔（名圭・字廷錫・称順蔵一廿九歳）を訪ひ留宿」とある。「轟飲」痛飲する。「潮満潮乾」二島。長府の沖合いに浮かぶ満珠島・干珠島の二島のこと。「島」は「島」と同じ。『日本書紀』巻二に、潮の満ちる玉（潮満つ瓊）を海水に漬けたら潮がたちまち満ち、潮の引く玉（潮涸る瓊）を漬けたら潮がひつりてに引くという伝説が見える。「吾因二島名」ここの「島」の字を『詩集』は「隴」に作る。「斛」容量の単位。「真珠」酒。唐の李賀の「将進酒」の詩に「小槽　酒滴って真珠紅なり」とある。「輪伊丹」伊丹の酒にどうして劣ることがあろうか、という反語の意にとる。但し、山陽が伊丹の酒を好んだことは、34「七星春歌」の詩に見えている。「鮮鱗雪」新鮮な魚。「任它」たとえ〜であっても。

8 廷錫内人索書戲作

廷錫の内人、書を索む。戯れに作る

玉腕溪藤 兩絶瑕

玉腕 溪藤 両つながら瑕を絶ち、

強人落墨 墨親磨

人に強いて墨を落とさしめ墨親ら磨る。

與君雲鬢 爭新様

君の雲鬢と新様を争うも、

漫縮秋蛇 柰拙何

漫に秋蛇を縮ねて拙を奈何せん。

廷錫夫人が私に揮毫を求めてきた。そこで戯れに詩を作った

あなたの白い細腕は剡州の紙と劣らず非の打ち所がなく、無理やり私に字を書かせるために自分で墨をすっていらっしやる。／私の墨書とあなたの黒々としたまげとでどちらが斬新か形を競ってみるが、この拙い書ときたらやたらに筆をくねくねさせるばかりで、どうしようもない。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一にのみ収める。また『全伝』文政元年四月に次の9の詩とともに録する。〔廷錫〕7の詩の注参照。〔内人〕夫人。〔玉腕〕夫人の美しい手をいう。〔溪藤〕剡州名産の紙。〔絶瑕〕少しも欠点がない。〔墨親磨〕本来なら「親磨墨」（親ら墨を磨る）というべきところを、韻と平仄の関係でこの語順となった。〔君〕廷錫夫人を指す。〔雲鬢〕高く円形に結った美しいまげ。〔新様〕新しい様式。〔縮秋蛇〕草書の筆勢が輪に巻いて結ぶような形になっていることをいう。〔奈拙何〕この拙い書をどうすればよいのだろうか。結局、自分の墨書は夫人の美しい黒髪に及ぶべくもない。

9 廷錫又令内人理吾髮

廷錫又た内人をして吾が髪を理めしむ

不獨調羹侑客卮 ひとりあつしのととのさかくさかす 獨り羹を調え客に卮を侑むるのみならず、

平梳理我髮離披 たひらかに我が髪を離披たるを梳理す 平らかに我が髪を離披たるを梳理す。

二毛羞不青青鬢 にもうはせいでいせいで 二毛羞ず青青たる鬢にあらざして、

應似佗時雪藕絲 まさになにせつこういと 應に似るべし佗時雪藕の絲。

廷錫がさらに夫人に私の髪を整えさせる

夫人は料理を作り、客人に杯をすすめるだけでなく、乱れた私の髪を平らに梳く。／白髪まじりの私は鬢の毛が黒々としておらず、いつか真っ白になるに達しないのを恥じるばかり。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』卷十一にのみ収める。また『全伝』文政元年四月に録する。〔理吾髮〕「理髮」は、くしで髪を整える。〔調羹〕食物を調理する。〔卮〕さかずき。〔平〕『詩集』は「且」に作る。〔梳理〕髪をすく。〔我〕『詩集』は「吾」に作る。〔離披〕不揃いなさま。〔二毛〕白髪まじりの人。作者自身を指す。〔青青〕黒々としているさま。〔鬢〕頭の左右側面の耳ざわの毛。〔佗時〕将来。〔雪藕絲〕若いはすの纖維から取る糸。若いはすは色が白いで「雪藕」という。ここでは白髪を喩える。

10 題劉先主像

劉先主の像に題す りゆうせんしゆぞうだい

雷霆當初故戰兢 らいいていとうしよことさうせんきよう

雷霆 當初 故に戰兢 らいいていとうしよことさうせんきよう

蛟龍至竟見飛騰 こうりゆうしきようひとう

蛟龍 至竟 飛騰を見わす こうりゆうしきようひとう

頼山陽「西遊詩卷」訳注(一)

童 童 一 樹 柔 桑 綠  
どうどう いちじゆ じゆうそうみどり  
 童 童 一 樹 柔 桑 綠 乃 り、  
どうどう いちじゆ じゆうそうみどり  
 化 作 蜀 山 青 萬 層  
か しょくせん あお ばんそう な  
 化 して 蜀 山 の 青 き 万 層 と 作 る。

劉備の肖像画に題する

雷の音に初めはわざと恐れたふりをしたが、みずちは最後には天に上った。／一本のよく茂った緑の桑の若葉が、蜀の山で幾重にもかさなる青い層と化したように。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一にのみ収める。なお文政八年の作「詠三国人物十二絶句」(『詩鈔』巻八・『詩集』巻十八)の「先主」の詩の第三・四句は、この詩の第三・四句に酷似している。「劉先主」三国時代の蜀の劉備のこと。「雷霆」かみなり。「故戦兢」わざとおそれおののく。劉備が曹操と当世の名臣の品定めをしていた時、雷の音に驚いたふりをして箸をとり落としたことを踏まえる。実際は「当今の英雄は君と私だけだ」という曹操の言葉に驚いたのを、たまたまこの時に轟いた雷鳴におののいたように装ったので「故に」という。このことは『三国志』蜀書・先主伝の注に引く『華陽国志』に見える。「蛟竜」みずち。想像上の動物で、竜の一種。「至竟」結局。ついに。「見飛騰」みずちは水を得ると、雲や霧をおこして天に上るといふ。ここでは、劉備が蜀王朝を立てて帝位についたことを指す。「童童」よく茂っているさま。「柔桑」桑の若葉。劉備の育った家のそばによく茂った桑の樹があったことが、先主伝に見える。「蜀山」蜀(四川省地方)の山の総称。「青」唐の白居易の「長恨歌」に「蜀江の水は碧に蜀山は青し」とある。「万層」幾重にもかさなった層の意か。

11 題源鎮守獻弓鎮夢魔圖 「源鎮守、弓を獻じて夢魔を鎮むる図」に題す

萬骨枯餘唯一弓　　ばんこつかあま 万骨枯れて余すは唯だ一弓、  
 龍鍾白首爲誰雄　　りゅうしゅうはくしゅ 龍鍾　　たがため 誰が為にか雄なる。  
 此身不及脩蛇影　　このみおよ 此の身及ばず脩蛇の影、  
 鎮夢猶參宸幄中　　ゆめしず 夢を鎮めて猶お宸幄の中に參るに。

「源義家が弓を献上して白河法皇が夢にうなされるのを鎮める図」に題する

いくさに命を落とした幾多の武士たちの骨はみな朽ち果ててただ一本の弓を残すだけだ。この老いた白髪頭はいったい誰のために意気盛んに手柄を立てようとしたのか。／弓は夢を鎮めるために献上されて天子のおそばにあるというのに、それにひきかえ我が身はいつまでも朝廷から報いられず、この一本の弓にも及ばないことだ。

『詩鈔』卷三に「題八幡太郎献弓鎮夢魔図」と題して収める詩の初案。『詩集』卷十一は初案の方を録するが、『詩鈔』と同じ題に改める。(源鎮守)源義家。平安時代後期の武將で、八幡太郎と号し、陸奥守兼鎮守府將軍となった。(献弓鎮夢魔)白河法皇が恐ろしい夢にうなされていた時、これを鎮めるため義家に命じて兵器を献上させた。義家が黒塗りの弓を一本献じて法皇の枕元に立てたところ夢にうなされなくなった、と『日本外史』卷二にある。「万骨枯余唯一弓」『詩集』は「唯」を「只」に作る。『詩鈔』は「百戦癩瘼未酢功」に改める。「竜鍾」老いさらばえているさま。「白首爲誰雄」「白首」は、しらが頭。義家を指す。『唐詩選』にとられる陳子昂の「祀山の烽樹に題して喬十二侍御に贈る」の詩に「憐れむ可し驄馬の史、白首誰が為にか雄なる」とある。(此身不及脩蛇影)「此身」は義家を指す。「脩蛇影」は大蛇の影。壁にかけてあった弓が杯の酒に映ったのを杜宣が蛇と間違えた故事(『風俗通義』怪神)を踏まえ、ここでは弓の意に用いる。義家は前九年の役や後三年の役などの東征で戦功を挙げながら、結局低

い官位のまま終わったことをいう。「詩鈔」は「黒蛇影」に改める。「鎮夢猶參宸幄中」「宸幄」は、天子の居場所に張り巡らしたと  
ばり。「詩鈔」は「得近五雲香暖中」に改める。

12 赤關遇大含禪師將東 赤關にて大含禪師に遇う。師將に東

遊觀富岳賦贈 遊して富岳を觀んとす。賦して贈る

吾來泛火海 吾れ來りて火海に泛び、

君往上富山 君往きて富山に上る。

相逢赤關下 相い逢う赤關の下、

握手暫破顏 握手して暫く破顏す。

雖無酒腸海不測 酒腸の海の測られざる無しと雖も、

自有詩格山難攀 自ら詩格の山の攀じ難き有り。

共把醒眼評山海 共に醒眼を把つて山海を評し、

采眞歸來重合歡 采眞 歸り來りて重ねて合歡す。

取吾火海火 吾が火海の火を取つて、

融君富山雪 君が富山の雪を融かん。

煎君雲華喫七椀 君が雲華を煎て七椀を喫せば、



四腋生風凌列缺　しえき　かぜ　しやう 風を生じて列欠を凌がん。

與君下視大八洲　きみ　おおよしま 君と大八洲を下視せば、

海如蹄涔山如垤　うみ　てしん　ごま　あつつか 海は蹄涔の如く山は垤の如くならん。

禪師不解飲。其山產茶、名曰雲華。此回亦與余茗飲劇談。故云。

禪師、飲を解せず。其の山、茶を産し、名づけて雲華と曰う。此の回亦た余と茗飲し劇談す。故に云う。

下関にて大含禪師に会った。禪師は富士山を見に東へ旅立とうとしていた。そこで詩を作って贈った

私は東から来て肥後の海に浮かぼうとし、あなたは西から行って富士山に登ろうとする。／この下関で会い、握手して暫し顔をほころばせた。／あなたの酒量はさほど多くはないが、詩の格調にはおのずと他者の追隨を許さぬ高さがある。／ともに醒めたまなざしで山海の景物を評し、とらわれない自由の世界に帰ってなお一層喜びを共にした。／私が行こうとする肥後の海（火海）の火で、あなたが登ろうとする富士山の雪を溶かそう。／あなたの下さった茶を煎じて七杯めを飲むと、二人とも両腋から風を生じていなすまの上を凌いで飛ぶような気分になる。／あなたと共に空から諸国を眺めてみたら、きつと海はたまり水、山は蟻塚のように小さく見えるだろう。

大含禪詩は下戸であられる。禪師のおられる山では茶を産し、雲華と命名されている。禪師はこの度また私と茶を飲んで愉快に語り合われた。そこで私はこのような詩を作った。

『詩鈔』卷三に「遇大含師師將東遊上岳賦此為贈」、『詩集』卷十一に「遇大含師」と題して収める詩の初案。（大含禪師）号は雲華。『全伝』によれば、文政元年三月二十四日、富士登山への道中、山陽と下関で出会って、ともに阿弥陀寺（現在の赤間神宮）の先帝

会（現在の先帝祭）を拝観した。「吾来泛火海、君往上富山」「火海」は、肥後の海。肥後の「肥」を古くは「火」と書いた。『詩鈔』『詩集』はこの二句を「吾泛火海君富山」の二句に改める。「相逢赤関下、握手斲破顔」『詩鈔』『詩集』は「相逢握手赤馬関」の一句に改める。「酒腸」酒量。「海」きわめて多い喩え。「把」くによって。「醒眼」ここでは、酒を飲めないがゆえの、酔っていない眼の意。「采真」自然に任せて作為を弄さない境地。「莊子」天運篇に見える言葉。「合飲」喜びをともにする。『詩鈔』『詩集』は「尽飲」に改める。「雲華」茶の別称。「四肢生風」『古文新宝』前集にとられる唐の盧全の「茶歌」に「七碗にして喫するを得ず、唯だ覚ゆ四肢習習として清風生ずるを」とあり、美味しい茶を飲んだ後、軽やかに空中に舞い上がる気分になることを「四肢生風」（四肢の下に風が生ずる）という。ここは、山陽と禅師の二人なので、「四肢」になった。「列欠」いなずま。「下視」高い所から下を見る。「大八洲」日本の古称。「蹄落」牛馬の足跡にたまった水。僅かな量の喩え。「垤」蟻塚。この最後の句に似た用例としては、『芸文類聚』卷七十八に引く郭璞の「遊仙詩」に「東海は猶お蹄落のごとく、崑崙は蟻堆の若し」とある。「不解飲」酒が飲めない。『詩鈔』『詩集』ともに「禅師不解飲」以下の二十四字を欠く。但し『詩集』の注に「当時、未夕酒腸ヲ具へズ、雲華、亦飲ニ禁へズ、『醒眼』ノ句アル所以。『雲華』ハ、雲華自カラソノ山ニ採リテ製スル所ノ茶銘、即チ取りテ自カラ号トナセルナリ」という。「茗飲」茶を飲む。「劇談」愉快に語り合う。

13 題禅師畫蘭余平生愛蘭  
禅師の画蘭に題す。余平生蘭を愛す。

京寓有盆栽在

京寓に盆栽の在る有り

磁斗曾栽玉幾莖

磁斗曾て栽す玉幾莖

客窗風雨毎關情

客窓 風雨 毎に情に關す。

輸君藁裏一螺墨

君に輸す藁裏の一螺墨、

密葉 疎花 隨處生 密葉 疎花 隨處に生ずるに。

大含禪師が画いた蘭に題する。私はもともと蘭を好む。京都の家にも鉢植えの蘭がある

磁器製の酒器にこれまで純白の蘭をいくつ育ててきただろうか、旅先では雨や風のたびに家に置いて来たそれらの蘭が気になることだ。／あなたの荷物の中から一枚の墨画が現れて、それにすまもなく茂ったみごとな葉やまばらに咲いた花が描かれているのを見ると、私の蘭などとてもかなわぬ。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一に「題大含師画蘭似東道（広江）殿峰老人」と題して収める。（禪師）大含禪師。（京寓）京都の家。（盆栽）ここでは鉢植えの蘭を指すか。（磁斗）磁器製の酒器の意か。（玉）透き通って純白なものを喩える。ここでは蘭を指す。（客窓）旅の宿。（関情）心を動かす。（輪）負けてしまう。（君）大含禪師を指す。（藁裏）ふくろの中。（螺）墨を数える助数詞。

14 赤關寓居題嵐峽春遊圖 赤關の寓居にて嵐峽春遊図に題す

響洋波浪曉昏譁 響洋の波浪 曉昏譁しく、

海驛東風不見花 海驛の東風 花を見ず。

想得嵐山好時節 想得たり嵐山の好時節、

香雲堆裏沸箏琶 香雲堆裏に箏琶沸くを。

赤關西北、接玄海處、俗呼閻澤。

頼山陽「西遊詩卷」訳注（一）

赤関の西北、玄海に接する処を、俗に闇沢と呼ぶ。

下関の仮住まいで「嵐峽春遊図」に題する

響灘の波はひねもす騒がしく、下関では春風は吹くものまだ桜は咲いていない。／京都の嵐山では春の好い時節になれば、一面の桜の咲く中、箏と琵琶の音が響き渡るのを思い出した。

下関の西北、玄界灘に面する辺りを、俗に闇沢と称する。

この詩は『詩鈔』には見えず、『詩集』巻十一にのみ収める。「嵐峽」京都の嵐山の麓を流れる大堰川の山峽。「響洋」響灘。山口県西方、福岡県北方の海域。「波浪」『詩集』は「放浪」に誤る。但し、注に「波浪」、初メ『潮信』ニ作ル」とある。「晝昏」朝から晩まで。「海駅」港。ここでは下関を指す。「東風」春風。「嵐山」京都市の西にある山。桜の名所。「香雲」かぐわしい雲。一説に、花が一面に咲くさま。李白の「山僧を尋ねて遇わざるの作」の詩に「香雲徧く山に起こり、花雨 天従り来る」とある。「堆裏」(香雲が) 積み重なっている中に。「箏琶」箏と琵琶。箏は竹製の弦楽器で、琴の一種。琵琶は四弦の弦楽器で、胴は梨形、柄に四本の柱があるもの。「赤関西北……」この注記は『詩集』には見えない。

15 檀浦行倣李長吉體

檀浦行。李長吉の体に倣う

赤關東口、海山相迫處、爲檀浦。平氏舉族挾養和帝、投海者也。

赤関の東口、海山相迫る處を、檀の浦と爲す。平氏の族を挙げて養和帝を挟み、海に投ぜし者也。

海鹿吹浪鼓聲死

海鹿 波を吹いて鼓声死し、

龍衣出沒狂瀾紫

龍衣出沒して狂瀾紫なり。

敗鱗蔽海春風腥

蒼溟變作桃花水

獨有介蟲喚姓平

夕陽蘆根當橫行

寄語行人休悽惻

榮衰相更誰得識

君不見鬼武之鬼亦不免餓

身後豚犬交相食

敗鱗 海を蔽って春風腥く、  
蒼溟 變じて桃花水と作る。

ひとり介虫の姓平と喚ぶもの有り、  
夕陽の蘆根 當に横行すべし。

語を寄す 行人 悽惻するを休めよ、  
榮衰相い更まること誰か識るを得ん。

君見すや鬼武の鬼も亦た餓うるを免れず、  
身後 豚犬交も相い食みしを。

浦上産蟹。面目猙獰。呼平家蟹。鬼武、源將軍小字。將軍殲平族、未廿餘年、二子相仇、霸業頓墮。余嘗著日本外史、於源平二家興替、最致意焉。今經此地、欲作一長歌、以敘其事、旅況倥傯、未暇及也。姑爲短章、託言傲古。必惹觀者姍笑耳。裏識。

浦上に蟹を産す。面目猙獰たり。平家蟹と呼ぶ。鬼武とは、源將軍の小字なり。將軍、平族を殲くして、未だ廿余年ならざるに、二子相い仇し、霸業頓に墮ちたり。余嘗て『日本外史』を著すに、源平二家の興替に於て、最も意を致せり。今、此の地を経て、一長歌を作り、以て其の事を叙せんと欲するも、旅況倥傯にして、未だ及ぶに暇あらざる也。姑く短章を爲り、言を託し古えに倣う。必ず觀る者の姍笑を惹かんのみ。裏識す。

頼山陽「西遊詩卷」訳注(一)

壇ノ浦の歌。李賀の詩体にならう

下関の東岸の海と山が迫った場所を壇ノ浦と呼ぶ。平家が一族で養和帝を抱いて、海に身投げしたところである。

いるかが波を吹いて鼓の音が途絶え、帝の紫色の着物が荒れ狂う波間に漂って見えたり隠れたりしている。／兵士の死体があちこちに浮かぶ海面の上を春風が生臭く吹き、青い海が血潮に染まって赤い水に変わる。／ただ一匹平家を名乗る蟹だけが、夕陽に照らされた葦の根元を横切っている。／さまよっている平家の兵の霊に申し上げる、どうかもう悲しみ嘆かれぬように。栄枯盛衰がこれからどう移り変わっていくかは誰にもわからないのだから。／君は知っているだろう、頼朝の死後、子孫が互いに殺し合って滅び、「鬼武者」と呼ばれた彼の霊を祭る者も絶えてしまったことを。

壇ノ浦に蟹を産する。その顔つきは凶悪であり、平家蟹と呼ばれる。鬼武は、源頼朝の幼名である。頼朝が平家一族を滅ぼしてから、わずか二十年余りのうちに、彼の二人の子が互いに憎みあった結果、頼朝が成し遂げた覇業は一気に地に墮ちてしまった。私は以前『日本外史』を著した時、源平二家の興亡に関して、最も多く筆を費やした。この地を踏んだ今、長歌一首を作ってその事を述べたかったが、慌ただしい旅ゆえ、その暇がない。しばらく短い詩を作り、李賀の詩のスタイルを真似して言葉に託す。きっと見た人は笑うに違いない。裏記す。

『詩鈔』卷三、『詩集』卷十一に「壇浦行」と題して収める詩の初案。それらでは「幾旬之山如竜尾、蜿蜒曳海千余里。直到長門伏復起、隔海豊山呼欲騰。帆檣林立北岸市。吾自平安来、行循山勢与之偕。驚看海門潮勢如奔雷、屈曲与山相擊排。南望予山青一髮、海水漸狭如囊括。想見九郎驅敵来、平氏如魚源氏獺。岸燈水浅誰得脱」の九十八字が「海鹿吹波鼓声死」の句の前に加わり(但し、

『詩集』では「奔雷」を「雷奔」に作る。『詩集』の注に「初稿、『海鹿』以下、タゞ数句ヲ著クルニ過ギザリシヲ、後ニ改メテ、コノ定稿ヲ得タルナリ」という。〔檀浦〕壇ノ浦。下関の東側の海岸のうち、早鞆ノ瀬戸と呼ばれる、関門海峡の幅の最も狭い所に面した部分の呼称。源平合戦最後の戦場として知られる。なお「檀」は「壇」の誤り。『詩鈔』『詩集』では「壇」に作る。〔行〕歌謡体の長歌。〔李長吉体〕唐の詩人・李賀の詩のスタイル。長吉は李賀の字。李賀の詩は『楚辞』や李白の影響を受けた、幻想的でロマンチズムに富む作風で知られる。〔養和帝〕安徳天皇。在位一八〇〜八五。平氏とともに西国に都落ちし、壇の浦の戦いの時、平清盛の未亡人時子に抱かれ、僅か八歳で入水した。〔海鹿〕ここではいるかの意。壇ノ浦の戦いの前に、平家敗戦の予兆として、二千頭のいるかが平家の船の下をくぐっていった故事（『平家物語』巻十一）を踏まえる。〔浪』『詩鈔』『詩集』は「波」に改める。〔鼓声死〕いくさの時に打ち鳴らされるつつみの音が途絶える。ここでは平家の軍が敗れたということ。〔竜衣〕皇帝の着物。『詩鈔』は「釋竜」、『詩集』は「穆竜」に改める。〔狂瀾〕荒れ狂う大波。〔紫〕紫衣は君主の衣服であり、安徳天皇の着物が波間に漂うさま。〔敗鱗〕魚の死体。戦死して魚のように水に浮かんだ平家の死体を喩える。〔蒼溟〕青々とした海。〔桃花水〕桃の咲く頃の雪解け水。ここでは海が血潮に染まって赤くなるさま。〔介虫喚姓平〕いわゆる平家蟹のこと。〔夕陽蘆根当横行』『詩鈔』『詩集』はこの句以下を「沙際至今尚横行。鑿（詩集）は「鑿」に作る）鰲貂蟬両一夢、唯見海山蒼蒼連神京。山日落、海如墨。何物遮船夜啾啾、吾語冤魂且休哭。汝不聞鬼武之鬼亦不免餒、身後豚犬交相食」に改める。〔寄語〕伝言する。〔行人〕旅人。ここでは、戦に敗れて死んだ平家の兵の亡霊を指す。〔悽惻〕悲しみいたむ。〔君不見〕歌謡体の詩で読者の注意を促すため、句の冒頭に置かれる常用語。〔鬼武〕源頼朝のこと。幼名を鬼武者といった。〔鬼亦不免餓〕源氏が滅亡したことをいう。〔鬼〕は死者の魂で、それが「餓」えるとは、子孫が絶滅して、祖先を祭る者がいなくなることを指す。〔身後〕死後。〔豚犬〕子孫に対する謙称。ここでは頼朝の子孫を指す。〔交相食〕互いに殺し合う。頼朝の子・二代將軍頼家が、頼朝の妻政子の父である北条時政によって殺され、さらに頼家の弟・三代將軍実朝が、頼家の子公暉によって殺されたことなどを指す。〔浦上産蟹』『詩鈔』『詩集』は「浦上」以下の九十二字を欠くが、『詩集』の注に「又、初稿書蹟ニ識語アリ」としてその全文を録する。〔二子〕頼家と実朝。〔余嘗著日本外史、

於源平二家興替、最致意焉。山陽の『日本外史』の初稿は二十歳代で完成していた。全二十二卷中、卷一―卷四が源平二氏の記述にあてられている。「倅徳」切迫し、忙しいさま。「託言」「文選」所収の陸機の「文の賦」に「或いは言を短韻に託し、窮迹に對して孤り興る」とある。「倅古」詩題にある「倅李長吉体」のことを指す。「姍笑」あざ笑う。